

細川幹夫著 『安徳じゃが浮かびたい』

麗澤大学出版会、平成一六年四月、一八九〇円

卯田 幸子

道徳科学研究センターが発行する『モラロジ―研究』に、細川教授の近刊著書の書評を取り上げたいとの申し込みを著者が編集者から受けたようです。著者からの連絡で「適当な人はいないか」という。そこで、この研究に対して助言した早稲田大学の平家物語・戦記物語専攻の大津雄一助教授を推薦させていただきました。したが、大津助教授は「いろいろな説がありますので」と遠慮されているようです。

そこで筆者が淑徳大学大学院修士課程在学中にお世話になった森岡清美博士（東京教育大学名誉教授、家族社会学の権威）とユング心理学・生涯発達論専攻の金子保教授に本書を贈呈して書評をお願いしてみました。私（卯田）に「まず貴女が書きなさい。見てあげるから」という。そこでとうとう引き受ける羽目になった次第です。著者から、「それなら」ということで、これまでの書評数編を参考資料として送っていただき、それを参考にしながら私の務めを果たしたいと思います。

まず麗澤大学出版会の出版案内にもあるように、本書はこれまでの『平家物語』に見られる「通説を打ち破り、四国山中で展開した安徳天皇四国潜幸の経過を、為近家一子相伝の秘話に基づき初めて解明したもう

一つの平家物語」です。したがって、平家物語に関する既存のさまざまな論文や、平家伝説の地方史を渉獵した学術研究を主目的としたものではありません。著者の「まえがき」にもあるように、本書は為近家の伝承を基本的な視点にして、安徳天皇四国潜幸伝説地（阿波の祖谷、淡路、讃岐、土佐の物部周辺、越知周辺）の伝説・伝承を比較照合し再検討して一般向きに書き上げたものです。

そこで、目次もつぎのようにアトラクティブに構成されています。

まえがき

第一章 壇ノ浦の安徳天皇は替え玉だった

第二章 為近翁が語る四国潜幸の伝承

第三章 安徳天皇即位の背景——平清盛と後白河法皇

第四章 なぜ西国に行幸したのか——清盛の大戦略

第五章 平家の二手分断作戦——潜幸の謎を解く鍵

第六章 安徳天皇崩御とその陵墓

第七章 天皇に供奉した人たち——流浪する落人

第八章 平維盛・資盛の土佐潜行伝説

第九章 安徳じゃが浮かびたい——秘史公開の経緯

第十章 為近家・小松家の「贖罪」意識

あとがき

学会誌や学術雑誌に取り上げる普通の書評であれば、ここで各章の要点を書いてあるのですが、梗概は難解な学術論文の内容を専門家が一般読者に分かりやすく解説して取り次ぎ、多くの人々に関心を持つてもらうために書かれるものです。それはそれなりに意味があります。専門でない人々は読まないからです。

ところが、本書は一般向きに書かれていますから、歴史好きの人や平家物語や安徳天皇に関心のある方であれば、誰でも分かるように平易に書かれており、私の書評で大部分かつたような気になってもらうと困るのです。最近では軽薄短小のインターネット情報が氾濫して、重厚長大な図書や新聞の売れ行きまでもが落ち込み始めています。読者が自ら読んで、自らの力で興味や関心を広げて欲しいと思うからです。

細川教授は本書の中で私が早稲田大学教育学部の学生時代に薫陶を受けた恩師の故梶原正昭先生の著書から相当のヒントを受けているようで、『平家物語』の原文を引用される時には、梶原先生の『平家物語』（岩波文庫）を定本にしておられるほどです。ですから梶原先生の教え子の立場から、私なりに本書に対する感想を披瀝して、読者のご参考に供したいと思えます。

もう一つの平家物語

『安徳じゃが浮かびたい』とは何とも衝撃的なタイトルである。

われわれが知る安徳天皇とは、奢る平家の滅亡の象徴として歴史から消えた幼帝である。後白河法皇から平家追討の院宣をうけた源頼朝が、源義経をして平家軍を一ノ谷、屋島、長門壇ノ浦へと追い詰め、もはやこれまでと諦念した外祖母二位の尼（平清盛の妻時子）が「三種の神器」と共に、いたいけな幼帝を抱いて

壇ノ浦の波間の藻屑と消えたとなつてゐる。この「通説」に対して、これまでも異説がなかったわけではなく、古くからの研究書も存在しているが、本書は全く新しい「異説」として安徳天皇の四国潜幸秘話を明らかにしている。

ここで「衝撃」と述べたのは、かの時代から一度も公表されることなく土佐の山奥深き地で、代々為近家の一子相伝の秘事として守り継がれてきたという事実と、そのことを世に明かそうと為近家の当主の心を突き動かしたものが、為近翁の夢に出てきた安徳天皇の発した言葉であつたということである。

本書の著者には麗澤高校在勤中に生徒の教育問題や家族問題でいろいろと薫陶を頂いてきた。長年の先生の研究分野（家族社会学や教育社会学）とはかなり異色の分野でありながら、先生がひとかたならぬ情熱を注がれていたことは存じ上げていたが、ここまで史実と実証を重ねてまとめあげたという事実に、人智の及ばない大きな力のはたらきを感じざるを得ない。

この点に関して、毎日新聞論説委員の北村龍行氏は『週刊エコノミスト』（二〇〇四年六月一五号）で非常に適切な評価をして、次のように評論している。「為近家は、平氏から安徳天皇の守りを委ねられた藤原康の子孫である。現当主の為近幾樹翁は、後述する経緯によって一子相伝の禁を破り、九四年に秘話を公表した。著者はその伝承を基本にし、徳島県の祖谷や土佐の越知などの言い伝えと比較し、現地も踏査して本書を著した。」と述べ、つぎに「幾樹翁は一九四七年に、夢のなかで「安徳じやが浮かびたい」という子供の声を二度聞いた。秘話を知る幾樹翁は声の意味を察し、陵墓探しが続いた。ついに九四年に、御齋大明神を再発見し、祀ることもできた。声に応えられた、秘話も公開の時期を迎えた。」「歴史は常に勝者によって書かれてきた。しかし、敗者のみが知る真実も多い。一子相伝は、一子を除いて妻や子にも話すことはできない。

ない。そうやって八〇〇年間、秘密は守られた。」

このような為近家の天皇秘話伝承への尽力と、為近翁のほぼ五〇年に及ぶ天皇墳墓の再発見への尽力、さらに「それにしても二〇世紀末に至るまで、一二世紀以来の秘密を守り、悲運の天皇への贖罪の意識を保ち、陵墓を守る努めを果たそうと努め続けてきた人々がいたことに驚かされる。」と率直に言及している。

評者が感想をお願いした森岡清美先生は、つぎのように評している。「この話はどうも本当らしい。ただ、宝剣の所在をあそこまで追及しながら、現代の科学技術を駆使して確認していないのが残念だ」と。この率直な評論を著者にぶつけてみた。

そうすると、「その通りです。金属探知機で搜索することは、為近翁の方から先に申し出があつた」が、おそらく深い地中まで古代のセメント（たとえば、スペインのアルハンブラ宮殿の建設に使つたような石灰・赤土・珪石で固めたもので、近代のポートルランド・セメントとは違う）で固めているので、最新鋭の金属探知機で探すとすれば相当高額になる。研究費も尽きたし、また最新鋭の探知機で探してもエコーさえ出るかどうかも分からない。また、周辺の平家の子孫が全員探索を容認しているわけではないので、遠慮した表現に止めた、という。

ごく最近、為近翁から電話があつて、「わしも九一歳になつて、いつどうなるか分からんきに、これだけは先生に言うちよきます（言っておきます）。為近家には、天皇家に代々伝わる遺品（宝剣）をあそこに隠した、という伝承があるきに（あるから）」という告白を受けたという。細川先生はすぐに「それは息子さんや娘婿の小松さんにも打ち明けましたか。」と尋ねたところ、「はつきりと言つてない」という。著者に重大な一子相伝の秘密を漏らされたので、「これを公表してもかまいませんか」と伺えば、「かまん（結構で

す)。わしも肚をくくったきに（決断したから）」との返事があったという。

さらに、「天皇の重要な遺品や書類を入れていた木箱が、今でも親戚の山本家にある」という。その木箱は真つ黒にすすけているが、そこには「文治三年」という箱書きがあるという。この年号は安徳天皇が崩御されたのが文治二年だから、その翌年に重要な遺品を埋めたことになる。また、「その木箱の中には、銅板で作った御幣が入っているの、山本家の先祖が祭ってきたものじゃろう」と打ち明けられた。

著者は物部村でも伝承が次第に希薄になっていく現状を憂い、この書評にぜひ書き込んで欲しいと言われる。そこで、ここに謹んで記録させてもらいます。

さらに、私がかつて早稲田大学教育学部国語国文科に在籍し、師と仰いだ故梶原正昭先生は当時日本の中世文学「平家物語」研究の第一人者であり、その恩師に安徳天皇四国潜幸秘話をお伝えしたかったという無念が交錯する。本書に対して真つ先に快哉を叫んで下さったのではないかと感慨である。なぜなら、本書では安徳と後鳥羽の二人天皇が並立した時期を「東西朝」と名付けて、後世の「南北朝のモデル」になったのではないかと述べている。その記事に接した時に、梶原先生がわれわれミ学生をわざわざ吉野の後醍醐天皇陵に案内された意味を思い出したからである。

毎日新聞の北村龍行氏が「著者は人間の社会化のメカニズムの研究者である。何が真実かは、今後の歴史学に任せて、歴史や伝統が人間の社会的あり方を大きく左右することは、まちがいに示された。」と締めくくっているように、私もつぎのように締めくくりたい。

歴史の事実はともかく、一子相伝として大切に守り伝えてきた真実に対して素直に敬意を表したい。本書の全編を流れる主題は、中国古典「中庸」にある「至誠無息。不息則久。則久有徴」（至誠は息むことなし。

息まざれば即ち久し。久しければ即ち徴あり）ということ、つまり至誠（真心）には休息がなく、その働きは永遠であり、至大のものである。だから、何らかの兆候があるということではないだろうか。

なお、香川県の某高松放送局から為近翁への電話連絡によれば、本書の内容を平成一七年中に「ドラマ」にして放送したいとのこと。本書も徐々に注目されているようだ。